

令和6年度 第2回
上下水道事業経営審議会
「下水道使用料の見直しについて」資料

1. 下水道使用料とは

(1) 下水道の目的

我が国の下水道事業は、当初、雨水及び汚水を排除することを目的として事業を開始しました。その後、昭和45年の下水道法改正において、公共用水域の水質保全が目的に追加されました。このように、下水道事業は、「浸水防除」、「公衆衛生の向上」、「公共用水域の水質保全」を大きな目的として事業が実施されています。

- ① 浸水防除・・・都市に降った雨の排除により、浸水被害を防除
- ② 公衆衛生の向上・・・市街地に汚水が滞留しないよう汚水を排除し、公衆衛生を確保
- ③ 公共用水域の水質保全・・・汚水を適切に処理することで河川・海等の水質を保全

(2) 下水道使用料の使途

先に述べたとおり、下水道事業は、その目的のために欠かすことのできない公共性、公益性の高い都市基盤施設です。また、近年、頻発する地震で下水道施設が被災した場合、公衆衛生問題や交通障害の発生ばかりか、トイレの使用が不可能となるなど、住民の健康や社会活動に重大な影響を及ぼします。下水道施設は他のライフラインと異なり、地震発生時に同等の機能を代替する手段がない重要な施設となっています。

このように重要性の高い下水道施設において、下水処理場に運ばれた汚水の処理費用や、管渠等の維持管理費、減価償却費などに使われているのが下水道使用料です。

<水処理施設>



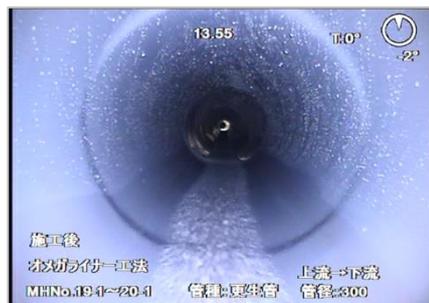
写真提供：(公財)岐阜県浄水事業公社

<放流ポンプ>



写真提供：(公財)岐阜県浄水事業公社

<老朽化した管渠の更生>



2. 本市の下水道事業の状況について

(1) 下水道事業の費用負担の考え方

下水道事業会計のうち、維持管理費と資本費についての費用負担の考え方は下表のとおりです。

雨水分はすべて公費負担です。汚水分は下水道使用料ですべてを賄うのが原則ですが、令和5年度の決算では、使用料で賄えたのは使用料対象経費のおよそ8割程度であり、残りは公費（税金）に頼っているのが現状です。

図表1 維持管理費と資本費の経費負担の考え方（雨水と汚水）

| | 雨水分 | 汚水分 | | |
|-------|-----------------|----------------|-------------|-------------|
| 維持管理費 | 公費（一般会計繰入金、基準内） | 私費（下水道使用料） | | |
| 資本費 | 公費（一般会計繰入金、基準内） | 私費（下水道使用料） | 公費（一繰）（基準内） | 公費（一繰）（基準外） |
| | | 使用料で100%賄うのが原則 | 0%が原則 | |

図表2 汚水処理費（令和5年度決算）※税抜き

| 使用料対象経費 | | | |
|------------|-----------|--|---------|
| 18億9,388万円 | | | |
| 使用料 | 基準内繰入金 | | |
| 15億2,362万円 | 3億3,204万円 | | |
| | 基準外繰入金 | | |
| | 1,920万円 | | |
| | | | その他 |
| | | | 1,902万円 |

【参考】

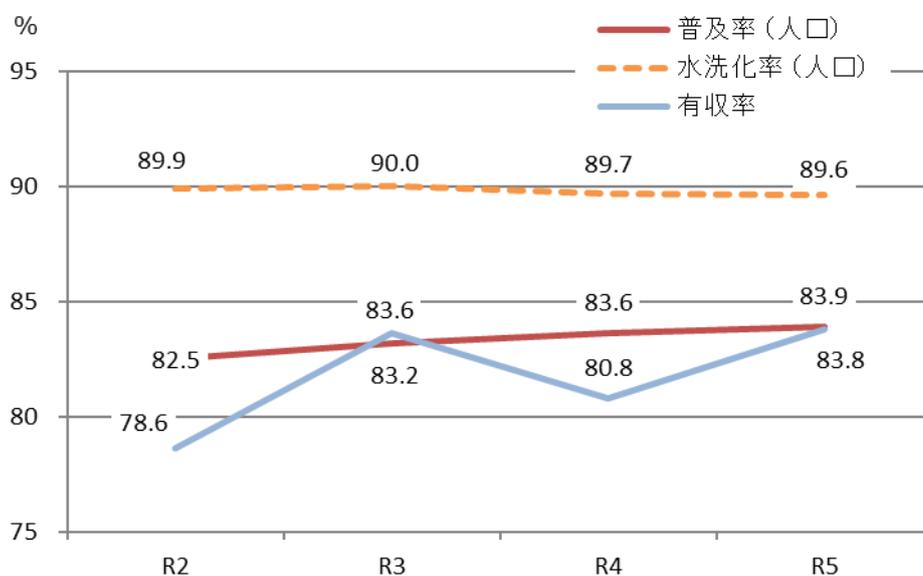
建設改良費の財源は、下図のとおりとなっています。

| | | | | |
|-----|-----|-------|-----|------------|
| 雨水分 | 補助分 | 国庫補助金 | 地方債 | |
| | 単独分 | 地方債 | | |
| 汚水分 | 補助分 | 国庫補助金 | 地方債 | 受益者 負担金 |
| | 単独分 | 地方債 | | |

(2) 近年の事業状況

本市の地方公営企業法適用以降の事業状況は下表のとおりです。

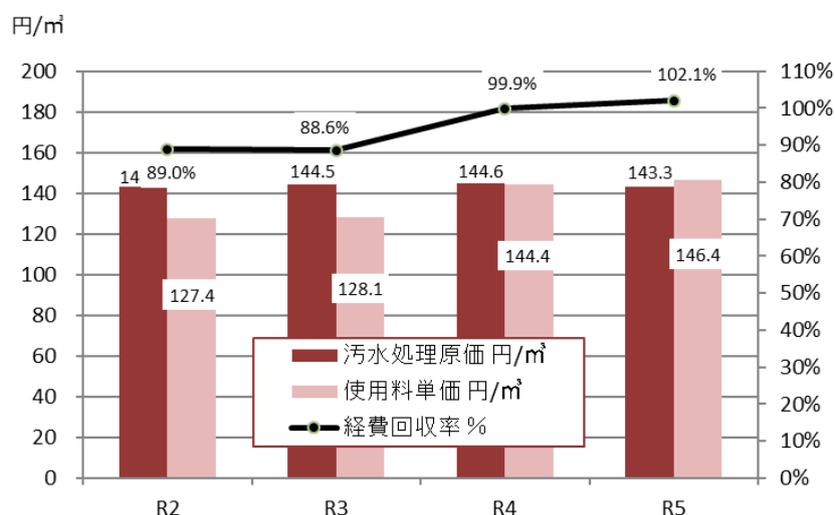
図表3 下水道普及率、水洗化率、有収率の推移



図表4 汚水処理原価、使用料単価、経費回収率の推移

| | | R2 | R3 | R4 | R5 |
|------------|------------------|------------|------------|------------|------------|
| 有収水量 | m ³ | 10,543,539 | 10,580,123 | 10,439,873 | 10,410,300 |
| 資本費※ | 千円 | 976,898 | 930,813 | 966,231 | 936,606 |
| 維持管理費※ | 千円 | 533,610 | 598,285 | 543,358 | 555,540 |
| 汚水処理原価※ | 円/m ³ | 143.26 | 144.53 | 144.60 | 143.33 |
| うち資本費原価※ | 円/m ³ | 92.65 | 87.98 | 92.55 | 89.97 |
| うち維持管理費原価※ | 円/m ³ | 50.61 | 56.55 | 52.05 | 53.36 |
| 下水道使用料 | 千円 | 1,343,679 | 1,355,440 | 1,507,332 | 1,523,615 |
| 使用料単価 | 円/m ³ | 127.44 | 128.11 | 144.38 | 146.36 |
| 経費回収率※ | % | 89.0% | 88.6% | 99.9% | 102.1% |

※決算統計報告値を参照しており、基準内繰入（分流式）控除後の数値



(3) 下水道使用料体系

本市の現行の下水道使用料は下表のとおりです。

図表 5 下水道使用料体系

| (消費税抜) | | | |
|--------|---------------------------------|---|-------|
| 種別 | 区分 | 汚水の排除量 | 使用料 |
| 一般用 | 基本使用料 | | 550 円 |
| | 超過使用料 (1 m ³ につき) | 20 m ³ まで | 90 円 |
| | | 20 m ³ ～50 m ³ まで | 150 円 |
| | | 51 m ³ ～100 m ³ まで | 170 円 |
| | | 100 m ³ ～200 m ³ まで | 185 円 |
| | | 201 m ³ 以上 | 200 円 |
| 公衆浴場用 | 1 m ³ につき | | 20 円 |

※使用料は、上表に掲げる区分により算定した額の合計に 1.1 を乗じた額とします。この場合において生じた 1 円未満の端数金額は切り捨てるものとします。

3. 下水道使用料の改定目的と主な将来の事業環境について

(1) 下水道使用料の改定目的

地方公営企業は、地方公営企業法において、「地方公共団体の一般会計又は他の特別会計において負担するものを除き、当該地方公営企業の経営に伴う収入をもって充てなければならない」という独立採算制が基本原則として定められています。

しかしながら、人口減少等に伴う収入の減少や施設の更新需要の増大、光熱費等の高騰による汚水処理費用の増嵩など、下水道事業を取り巻く経営環境は厳しさを増しています。

本市の下水道事業では供用開始以降 3 度の使用料改定を行っていますが、それでもなお使用料対象経費の全額を賄うことができず、一般会計からの繰り入れに頼って運営している状況です。

下水道事業を安定的に経営していくため、近年の物価高騰へ対応するとともに、将来的に独立採算を達成することを目的として使用料改定を行います。

(2) 下水道使用料の算定期間

使用料の算定期間は、「下水道使用料算定の基本的考え方」※より、3 年から 5 年で算出するのが通例となっています。 ※建設省、自治省の協議により S62 に作成。

本市の経営戦略では 4 年毎に使用料などを検証することを定めており、令和 6 年 5 月に経営戦略の見直しを行いました。今回の使用料改定では令和 8 年度から令和 11 年度までの 4 箇年を算定期間とし、当該期間の推計値を使用することとします。

(3) 人口の予測

本市経営戦略においては、人口減少率の高い「市学校区別人口推計」を基に行政区域内人口を予測しました。また、処理区域内人口（供用開始区域内人口）についても減少傾向となると推測されるため、行政区域内人口の減少率を用いて将来推計を行いました。

ただし、新規の污水管渠布設による供用開始区域の増加分を加味しています。算定期間における人口予測は下表のとおりです。

図表 6 人口推計

| | | R8 | R9 | R10 | R11 |
|---------|---|---------|---------|---------|---------|
| 行政区域内人口 | 人 | 141,971 | 140,921 | 139,733 | 138,544 |
| 処理区域内人口 | 人 | 119,358 | 118,559 | 117,642 | 116,723 |
| うち新規増加分 | 人 | 80 | 79 | 76 | 75 |

※新規増加分は市街化調整区域全体の人口密度を採用しているため、実際には上振れする見込み

(4) 排水需要の予測

排水需要は、使用料算定期間における業務量を規定するとともに、流域下水道維持管理負担金等の支出額や使用料収入額等の見積もりの基礎となるものです。

本市経営戦略においては、処理区域内人口推計に対して過去 5 箇年平均の水洗化率 90%を乗ずることにより水洗化人口を算出しています。また、有収水量についても過去 5 箇年平均の 1 人 1 日当たり汚水量（0.26 m³/人日）より算出しました。排水量については、不明水対策の効果として現状値（R5）の約 84%から令和 8 年度より 2 %ずつ改善し、令和元年度の 90%の水準に戻るものとして試算しています。これらにより予測した排水需要は下表のとおりです。

なお、収益的支出に占める割合が大きい流域下水道維持管理負担金については、近年の光熱費等の高騰の影響を受けて、処理単価が令和 6 年度より 62 円/m³（令和 5 年度：56 円/m³）に値上がりしており、算定期間にも引き続いて大きな負担となると予測されます。

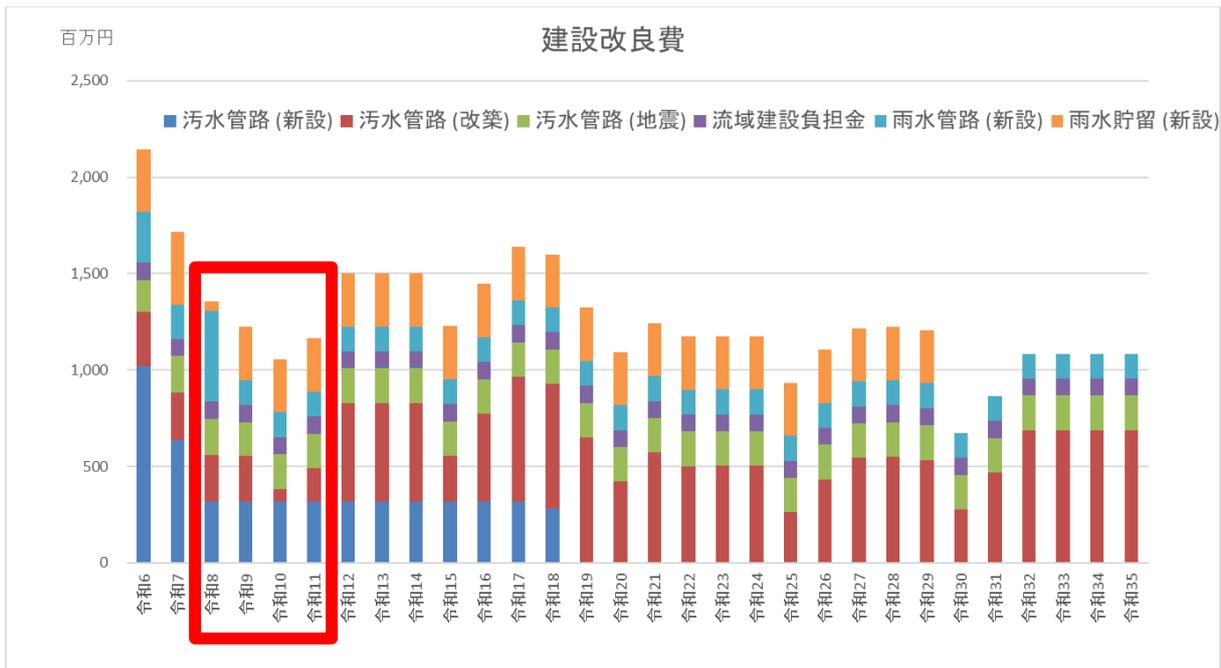
図表 7 排水需要推計

| | | R8 | R9 | R10 | R11 |
|--------|----------------|------------|------------|------------|------------|
| 年間排水量 | m ³ | 11,990,669 | 11,639,720 | 11,293,066 | 11,204,857 |
| 年間有収水量 | m ³ | 10,311,975 | 10,242,954 | 10,163,759 | 10,084,371 |
| 有収率 | % | 86.0 | 88.0 | 90.0 | 90.0 |

(5) 今後の施設の建設計画

本市経営戦略に基づいた 4 箇年の建設計画は次表のとおりです。過去に実施した事業の減価償却費及び企業債償還利子に加え、この建設計画に基づいて算出される当該経費の金額を本市経営戦略の収益的収支（使用料対象経費）に反映しています。

図表8 建設改良費の推移



(6) 施設の管理的経費（職員給与費を含む）

本市経営戦略においては、将来の物価上昇を見込むことは困難であるため、算定期間内においては令和6年度当初予算と同程度と見込んでいます。

(7) 独立採算達成に必要な使用料収入

本市経営戦略においては、国の示す適切な使用料（150 円/m³）と実際の使用料との差額を他会計補助金（3条補助金）として一般会計から繰り入れており、今回の使用料改定（令和8年度）において他会計補助金をゼロにする計画としています。また、分流式下水道等に要する経費（国が繰出基準に定める基準内繰入のうち本来は使用料で賄うべきとされている経費）に対する繰入金も使用料で賄いつつ、急激な使用者負担の増加を避けるため、令和8年度から令和20年度まで4年に1度の段階的な改定を行う計画となっています。

独立採算達成に必要な使用料単価及び改定後における使用料の見込みは下表のとおりで、次回の使用料平均改定率を約 **10%**と見込んでいます。

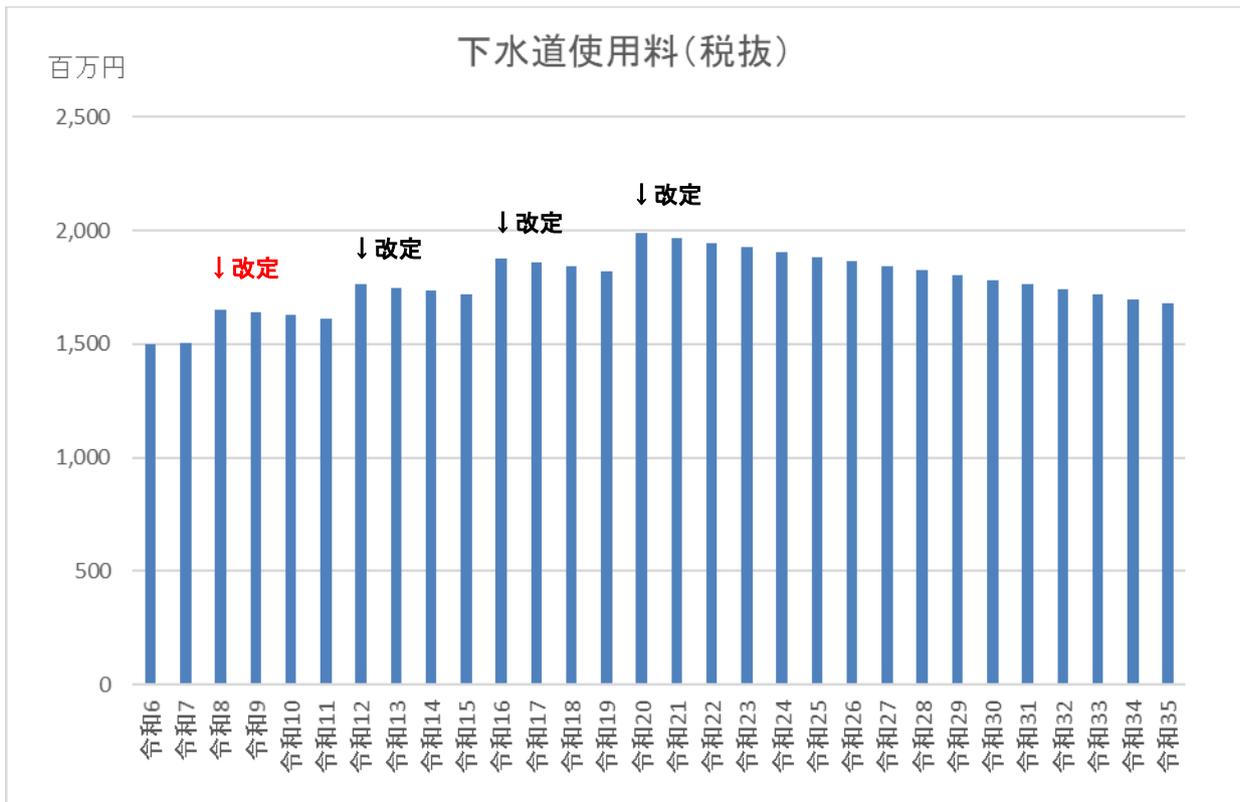
図表9 必要な使用料単価の推移

(現状値)

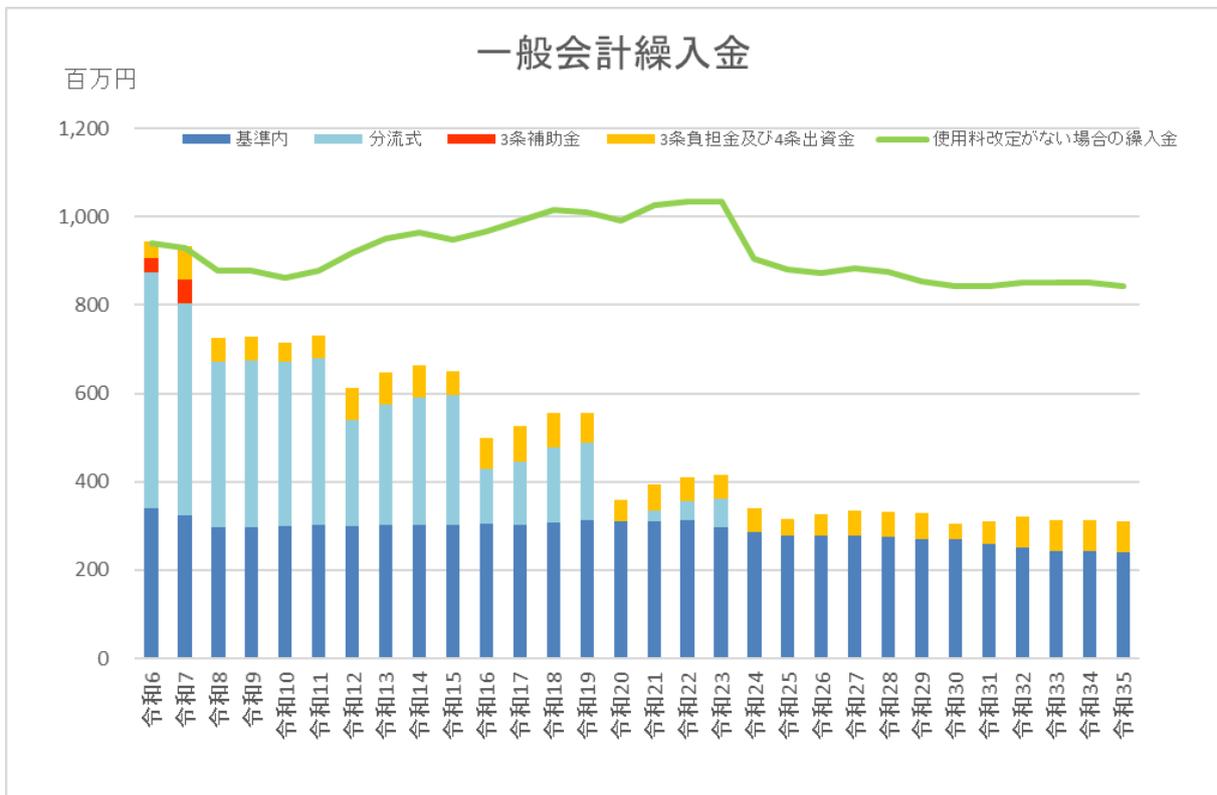
| | | R5 | R8 | R12 | R16 | R20 |
|-------|------------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 使用料単価 | 円/m ³ | 146 | 160 | 176 | 194 | 214 |

※R12以降の単価は4年毎の経営戦略の見直しと合わせて、都度、再算定

図表 1 0 下水道使用料の推移



図表 1 1 一般会計繰入金の推移 (参考)



(8) 投資・財政計画

3. (2) ~ (5) までの情報を基に試算した投資・財政計画は下表のとおりです。

図表 1 2 投資・財政計画 (収益的収支計画)

単位：千円

| 区 分 | | 年 度 | 令和8年度 2026年度 | 令和9年度 2027年度 | 令和10年度 2028年度 | 令和11年度 2029年度 |
|--|---------------------------|-----------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|
| 収 益 的 収 入 | 1. 営 業 収 益 (A) | | 1,777,392 | 1,771,010 | 1,759,835 | 1,749,278 |
| | (1) 下 水 道 使 用 料 | | 1,649,916 | 1,638,873 | 1,626,201 | 1,613,499 |
| | (2) 雨 水 処 理 負 担 金 | | 127,069 | 131,730 | 133,227 | 135,372 |
| | (3) 受 託 工 事 収 益 (B) | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (4) そ の 他 | | 407 | 407 | 407 | 407 |
| | 2. 営 業 外 収 益 | | 1,085,501 | 1,094,302 | 1,092,275 | 1,102,813 |
| | (1) 補 助 金 | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 他 会 計 補 助 金 | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | そ の 他 補 助 金 | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (2) 負 担 金 | | 390,619 | 393,797 | 388,298 | 395,035 |
| | 他 会 計 負 担 金 | | 390,619 | 393,797 | 388,298 | 395,035 |
| | そ の 他 負 担 金 | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (3) 長 期 前 受 金 戻 入 | | 677,466 | 683,089 | 686,561 | 690,362 |
| | (4) そ の 他 | | 17,416 | 17,416 | 17,416 | 17,416 |
| 収 入 計 (C) | | 2,862,893 | 2,865,312 | 2,852,110 | 2,852,091 | |
| 支 出 | 1. 営 業 費 用 | | 2,610,964 | 2,619,431 | 2,612,951 | 2,621,528 |
| | (1) 職 員 給 与 費 | | 149,677 | 149,677 | 149,677 | 149,677 |
| | 基 本 給 与 費 | | 73,095 | 73,095 | 73,095 | 73,095 |
| | 退 職 給 付 費 | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | そ の 他 | | 76,582 | 76,582 | 76,582 | 76,582 |
| | (2) 経 費 | | 889,540 | 879,421 | 857,582 | 852,025 |
| | 汚 水 管 渠 費 | | 32,549 | 32,549 | 32,549 | 32,549 |
| | 業 務 費 | | 77,241 | 77,241 | 77,241 | 77,241 |
| | 総 係 費 | | 36,329 | 36,329 | 36,329 | 36,329 |
| | 流 域 下 水 道 維 持 管 理 負 担 金 | | 743,421 | 733,302 | 711,463 | 705,906 |
| | (3) 減 価 償 却 費 ・ 資 産 減 耗 費 | | 1,571,747 | 1,590,333 | 1,605,692 | 1,619,826 |
| | 2. 営 業 外 費 用 | | 250,203 | 244,155 | 237,433 | 228,837 |
| | (1) 支 払 利 息 | | 250,014 | 243,966 | 237,244 | 228,648 |
| | (2) そ の 他 | | 189 | 189 | 189 | 189 |
| 支 出 計 (D) | | 2,861,167 | 2,863,586 | 2,850,384 | 2,850,365 | |
| 経 常 損 益 (C)-(D) (E) | | 1,726 | 1,726 | 1,726 | 1,726 | |
| 特 別 利 益 (F) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 特 別 損 失 (G) | | 1,726 | 1,726 | 1,726 | 1,726 | |
| 特 別 損 益 (F)-(G) (H) | | △ 1,726 | △ 1,726 | △ 1,726 | △ 1,726 | |
| 当 年 度 純 利 益 (又 は 純 損 失) (E)+(H) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 繰 越 利 益 剰 余 金 又 は 累 積 欠 損 金 (I) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 流 動 資 産 (J) | | 1,442,632 | 1,420,016 | 1,389,294 | 1,368,294 | |
| う ち 未 収 金 | | 334,796 | 334,796 | 334,796 | 334,796 | |
| 流 動 負 債 (K) | | 1,942,728 | 1,935,051 | 1,944,708 | 1,938,315 | |
| う ち 企 業 債 分 | | 1,257,971 | 1,250,294 | 1,259,951 | 1,253,558 | |
| う ち 一 時 借 入 金 | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| う ち 未 払 金 | | 671,702 | 671,702 | 671,702 | 671,702 | |
| う ち 引 当 金 | | 13,055 | 13,055 | 13,055 | 13,055 | |
| 累 積 欠 損 金 比 率 ($\frac{(I)}{(A)-(B)} \times 100$) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 地 方 財 政 法 施 行 令 第 15 条 第 1 項 に よ り 算 定 し た 資 金 の 不 足 額 (L) | | △ 757,875 | △ 735,259 | △ 704,537 | △ 683,537 | |
| 営 業 収 益 - 受 託 工 事 収 益 (A)-(B) (M) | | 1,777,392 | 1,771,010 | 1,759,835 | 1,749,278 | |
| 地 方 財 政 法 に よ り 算 定 し た 資 金 不 足 の 比 率 ((L)/(M) × 100) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 健 全 化 法 施 行 令 第 16 条 に よ り 算 定 し た 資 金 の 不 足 額 (N) | | △ 757,875 | △ 735,259 | △ 704,537 | △ 683,537 | |
| 健 全 化 法 施 行 規 則 第 6 条 に 規 定 す る 解 消 可 能 資 金 不 足 額 (O) | | — | — | — | — | |
| 健 全 化 法 施 行 令 第 17 条 に よ り 算 定 し た 事 業 の 規 模 (P) | | 1,777,392 | 1,771,010 | 1,759,835 | 1,749,278 | |
| 健 全 化 法 第 22 条 に よ り 算 定 し た 資 金 不 足 比 率 ((N)/(P) × 100) | | 0 | 0 | 0 | 0 | |

図表 1 3 投資・財政計画（資本的収支計画）（参考）

単位：千円

| 区 分 | | 年 度 | | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|-----------|
| | | 令和8年度 2026年度 | 令和9年度 2027年度 | 令和10年度 2028年度 | 令和11年度 2029年度 | |
| 資 本 的 収 入 | 資 本 的 収 入 | 1. 企 業 債 | 961,200 | 882,500 | 741,400 | 815,800 |
| | | うち資本費平準化債 | 129,000 | 118,000 | 114,000 | 102,000 |
| | | 2. 他 会 計 出 資 金 | 114,117 | 119,903 | 114,515 | 127,891 |
| | | 3. 他 会 計 補 助 金 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 4. 他 会 計 負 担 金 | 90,679 | 78,076 | 73,959 | 67,609 |
| | | 5. 他 会 計 借 入 金 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 6. 国（都道府県）補助金 | 426,250 | 363,010 | 344,440 | 356,740 |
| | | 7. 固定資産売却代金 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 8. 受益者負担金・区域外分担金 | 58,819 | 58,424 | 54,283 | 56,909 |
| | | 9. 工 事 負 担 金 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 10. そ の 他 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 計 (A) | 1,651,065 | 1,501,913 | 1,328,597 | 1,424,949 | |
| | (A)のうち翌年度へ繰り越される支出の財源充当額 (B) | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 純計 (A)-(B) (C) | 1,651,065 | 1,501,913 | 1,328,597 | 1,424,949 | |
| 資 本 的 支 出 | 資 本 的 支 出 | 1. 建 設 改 良 費 | 1,376,228 | 1,242,590 | 1,071,180 | 1,179,882 |
| | | 汚水管渠建設費 | 764,964 | 748,616 | 577,206 | 685,908 |
| | | 雨水管渠建設費 | 470,800 | 128,800 | 128,800 | 128,800 |
| | | 雨水貯留施設建設費 | 51,500 | 276,210 | 276,210 | 276,210 |
| | | 固定資産購入費 | | | | |
| | | 流域下水道建設負担金 | 88,964 | 88,964 | 88,964 | 88,964 |
| | 2. 企 業 債 償 還 金 | 1,257,971 | 1,250,294 | 1,259,951 | 1,253,558 | |
| | 3. 他 会 計 長 期 借 入 返 還 金 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 4. 他 会 計 へ の 支 出 金 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 5. そ の 他 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 計 (D) | 2,634,199 | 2,492,884 | 2,331,131 | 2,433,440 | | |
| 資本的収入額が資本的支出額に不足する額 (D)-(C) (E) | 983,134 | 990,971 | 1,002,534 | 1,008,491 | | |
| 補 填 財 源 | 補 填 財 源 | 1. 当年度損益勘定留保資金 | 894,281 | 907,244 | 919,131 | 929,464 |
| | | 2. 前年度利益剰余金処分別 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 3. 過年度損益勘定留保資金 | 672,235 | 651,065 | 628,449 | 597,727 |
| | | 4. 過年度利益剰余金処分別 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 5. 繰越工事資金 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 6. 消費税資本的収支調整額 | 67,683 | 61,111 | 52,681 | 58,027 |
| 計 (F) | 1,634,199 | 1,619,420 | 1,600,261 | 1,585,218 | | |
| 補填財源不足額 (E)-(F) | △ 651,065 | △ 628,449 | △ 597,727 | △ 576,727 | | |
| 他 会 計 借 入 金 残 高 (G) | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| 企 業 債 残 高 (H) | 19,087,892 | 18,720,098 | 18,201,547 | 17,763,789 | | |

○他会計繰入金

| 区 分 | | 年 度 | | | |
|-------------|----------|---------|---------|---------|---------|
| | | 令和8年度 | 令和9年度 | 令和10年度 | 令和11年度 |
| 収 益 的 収 支 分 | 収益的収支分 | 517,688 | 525,527 | 521,525 | 530,407 |
| | うち基準内繰入金 | 513,654 | 521,560 | 517,624 | 526,572 |
| | うち基準外繰入金 | 4,034 | 3,967 | 3,901 | 3,835 |
| 資 本 的 収 支 分 | 資本的収支分 | 204,796 | 197,979 | 188,474 | 195,500 |
| | うち基準内繰入金 | 154,337 | 148,523 | 150,617 | 150,267 |
| | うち基準外繰入金 | 50,459 | 49,456 | 37,857 | 45,233 |
| 合 計 | | 722,484 | 723,506 | 709,999 | 725,907 |

4. 使用料体系設定の基礎情報

(1) 使用料対象経費

使用料対象経費は一般的に需要家費、固定費及び変動費の3種類に分解されます。

① 需要家費

需要家費とは、下水道使用水量の多寡に係わりなく主として下水道使用者数に対応して増減する経費を指します。

ex) 使用料徴収関係経費 等

② 固定費

固定費とは、下水道使用水量及び使用者数の多寡に係わりなく下水道施設の規模に応じて固定的に必要とされる経費を指します。

ex) 資本費（減価償却費、企業債償還利息）、人件費 等

③ 変動費

変動費とは、主として下水道使用水量の多寡に応じて変動する経費を指します。

ex) 流域下水道維持管理負担金 等

使用料体系の見直しにあたっては、投資・財政計画で見込まれている各経費を上記の分類に分解し、基礎情報としていきます。

(2) 使用者群の区分（水量区分）

図表 5 で示したとおり、現在は使用料区分に応じて5つの使用者群を設定しています。本市経営戦略では現行の水量区分における使用料単価を基に必要な改定率を算定しており、今回の見直しにおいては現行の水量区分を維持します。

5. 使用料体系の見直しにあたって留意すべき点（検討事項）

安定した経営を行っていくための使用料体系の基本的な考え方としては、需要家費・固定費は基本使用料へ、変動費を超過使用料へ配賦することが適当とされています。

しかし、施設型事業である下水道事業の特性により、使用料対象経費に占める固定費の割合が極めて高く、この考え方に基づいた場合に基本使用料が高くなりすぎ、水量区分によっては使用者への急激な負担増となります。これを踏まえ、現在の使用料体系は各経費を平均的に配賦して構築されています。

以上のことから、今回の改定では使用料体系をゼロから再構築するのではなく、現在の使用料体系をベースとしながら、増収分の配賦方法について複数パターンを検討する方針とします。

<検討パターンの例>

- (1) 増収分を基本使用料に全額配賦 ※需要家費・固定費の全体に占める割合に留意
- (2) 増収分を基本使用料・超過使用料に分けて配賦
- (3) 増収分を超過使用料に全額配賦